

日本学
術会議

中国・四国地区ニュース

No 42
2011 3

発行
日本学術会議
中国・四国地区会議

記 事

学術会議地区活動について	1 頁
【寄稿】	
美術館学芸員の学術活動	2 頁
学術トピックス	5 頁
公開学術講演会について	7 頁
会員・連携会員一覧（中国・四国地区）	10 頁
地区会議事務局からのお知らせ	11 頁

学術会議地区活動について

日本学術会議中国・四国地区会議 代表幹事

第3部会員（高知工科大学学長）

佐久間 健人

本年度の学術会議地区活動の状況についてご報告いたします。

本年度は先ず平成22年3月8日（月）に広島大学医学部応仁会館において、地区会議運営協議会を開催し、平成22年度事業計画および公開学術講演会の開催について協議いたしました。

また、平成22年11月27日（土）に山口大学医学部において地区会議運営協議会を開催するとともに公開講演会を実施いたしました。今回の運営協議会においては、平成22年度の事業企画等について協議するとともに、来年度の公開学術講演会を愛媛大学にお願いすることを決定いたしました。それとともに、第23期日本学術会議会員候補者及び連携会員候補者の推薦に関して、本部事務局からの報告をもとに、中国・四国地区としての対応について話し合いがなされました。

引き続き山口大学医学部第3講義室において「医学領域と工学領域連携研究シンポジウム 未来を拓く医・工連携」と題してシンポジウムが開催されました。この講演会は三浦典子山口大学名誉教授のご尽力によって実現したものです。シンポジウムでは、金澤一郎日本学術会議会長の「医工連携の来し方行く末」という講演に続き、山口大学の岡正朗教授、浜本義彦教授による基調講演とパネルディスカッションがなされました。医工連携に関わる興味深いお話とともに、有意義なディスカッションがなされました。

来年度は、第23期の日本学術会議の新しい体制が決まることとなります。中国・四国地区会議としては、この地区の今後の学術活動を活性化するために、会員および連携会員の選考を注視するとともに、地区として必要な対応をとっていきたいと考えております。来年度は、中国・四国地区会議も新たな体制で活動することとなります。本地区の会員および連携会員の皆様には、今後も引き続き地区会議に対するご協力とご支援をお願いいたします。

美術館学芸員の学術活動

日本学術会議中国・四国地区会議 連携会員

(財団法人大原美術館館長)

高階 秀爾

大原美術館が卓越した実業家大原孫三郎によって岡山県倉敷の地に設立されたのは、昭和5年(1930年)のことである。昨年(2010年)は、開館80周年の記念の年にあたっていたので、数多い収蔵品の中から特に優れたものを選び抜いて一挙に公開した「大原BEST」展と、これまでもっぱら西洋と日本の近代美術を中心に展開してきた美術館活動を、江戸時代以前の古美術にまで視野を拡げて、雪舟の「山水図」と伝銭舜拳の「官女図」の2点の国宝をはじめ、円山応挙、青木木米、岡田米山人など主として江戸期の名品を揃えた「大原孫三郎 日本美術への眼差し」展というふたつの特別展を開催し、さらに関連するシンポジウムや記念音楽会などの多彩な記念行事を行った。それ以外にも、従来から続けて行われてきた若手芸術家支援の特別展、子供を対象としたチルドレンズ・アート・ミュージアム、観客参加のワークショップ、夏季講座、美術教室、ギャラリー・コンサートなどもこれまでと同じように実施されたこ

とはもちろんである。

このような活動は、人類の遺産である優れた美術品を広く一般の観衆に公開し、文化芸術の普及発展に寄与するためのきわめて重要な事業であり、美術館では担当の専門学芸員がその実施にあっている。しかし、美術館学芸員の責務はそれだけに盡きるものではない。これらのいわば対社会的活動と並んで、一般の人々の眼には必ずしも触れるものではないが、美術館にとっては同じように重要な学芸員の役割がある。そのひとつは美術作品の管理保全にかかわる仕事であり、もうひとつは収蔵作品についての学術的調査研究活動である。美術作品はきわめてデリケートな存在で、長い年月のあいだに汚れたり、損傷を受けたりする 경우가少なくない。特に温度、湿度、照明などの影響を受け易いので、収蔵庫や展示室などを常に望ましい状態に保つように配慮しなければならない。それも、作品によって環境の変化に対する対応も違ってくる。例えば、紙や絹に描かれた日本の絵画は、油絵よりも外界の変化を受けやすいので、特に慎重な対応が必要とされる。そのため、前述の「大原孫三郎 日本美術への眼差し」展の時には、展示室のなかに温湿度や照明の調整可能な展示ケースを新しく設置した。また、作品が美術館の収蔵品となった時点から、作品の状態を絶えずチェックして、必要に応じてクリーニングや修復などの措置を講じるのも、学芸員の重要な役割である。それはいわば、作品の健康管理や健康診断を受け持つホーム・ドクターのような役割と言ってよいであろう。

その一方で学芸員はまた練達の歴史家でもなければならない。美術作品はわれわれに優れた美の世界を提示してくれる貴重な存在である同時。さまざまの過去を背負った歴史的な存在でもあるからである。それ故、作品を正しく理解するためには、作品制作の状況を明らかにするとともに、それ以後作品がどのような経路を辿って美術館のコレクションに加えられるようになったか、その履歴をさまざまの関連資料や参考文献を精査することによってできるだけ正確に確定し、またかつて作品が展覧会等で発表されたことがある場合には、その時の批評やジャーナリズムでの反応を調査し、当時の社会状況の中で作品がどのような意味を持っていたかという歴史的な位置づけを行わなければならない。それはまさしく、過去の事象を解明する歴史家と同じ役割なのである。

学芸員によるこのような研究活動の成果は、美術館の紀要や学会誌などに論文のかたちで発表され、また展示カタログや作品解説などに反映されているが、このたび開館80周年の事業として、所蔵作品総目録の刊行という計画が発足した。これは、ふだん展示されていない作品も含めて、美術館が所蔵するすべての作品について改めて徹底的な調査を進め、各作品の図版はもとより、寸法、材質（支持体や絵具の種類）、署名、年記、その他の書き入れ、推定の場合も含めて制作年代、さらに現時点で判明

しているかぎりの来歴を収載し、必要な場合には参考文献やコメントも加えるというもので、いわばそれぞれの作品についての身許調査の総まとめである。大原美術館ではすでに一度、1991年に作品総目録を刊行しているが、その後新資料の発見や研究の進展によって新しい事実がわかったり、制作年代が修正される場合も生じた。

一例を挙げよう。大原美術館には、戦後アメリカの抽象芸術を代表するジャクソン・ポロックの作品が二点あるがそのうちのひとつ「カット・アウト」は、他のポロック作品に見られない特異の表現形態の故に世界的に注目を集めている。というのは、彼自身の創意による「ドリッピング」という独自の手法で画面を濃密な抽象模様で覆い盡くした後、その中央部分を奇妙な人間像のかたちに切り抜いて、裏から別の支持体を貼り合わせたものだからである。当然、中央の切り抜かれた部分は、背後の支持体の画面がそのまま見える。周囲の多彩濃密な部分と中央のどこかユーモラスな人型の空間との思いがけない取り合わせが鮮烈な効果を生み出す名作である。この作品は、1956年にポロックが没した後しばらくの間妻のリー・クラスナーの手許にあり、その後いくつかの画廊の手を経て、1966年に大原美術館の所蔵となった。当時、作品の制作年代は、1948年から50年の間とされていた。ところが近年になって、リー・クラスナーの残した遺品の中にポロック没後のアトリエを撮した写真が発見され、そこに認められる「カット・アウト」作品では、中央の人型部分に現在見られる筆跡がまだないことが明らかになった。つまり少なくともこの部分には、ポロックの死後の加筆があったわけである。内外の研究者によるこの写真やその他の補足資料の調査の結果、この加筆はリー・クラスナーによってなされたものであることがほぼ確実と見做されるようになり、制作年代は、当初の「1948 - 50年」から「1948 - 58年」へと修正された。

このような例は他にも少なからずあるが、それらはすべて総目録に反映されることになっている。所蔵作品が膨大な数にのぼるので、総目録刊行も長期戦とならざるを得ない。まずその第一弾として、海外作品編が間もなく刊行される運びとなった。それは多くの美術史研究者にとって、欠くことのできない貴重な基礎資料を提供するものとなるであろう。

学術トピックス

日本学術会議中国・四国地区会議 運営協議会委員
(香川大学長)

一井 眞比古

国連は2010年を「国際生物多様性年」と宣言し、さらに昨年10月には生物多様性条約第10回締約国会議が名古屋で開催されこともあり、生物多様性に関するテレビ放送や新聞記事が多く見られました。それらの影響もあり、生物多様性に関する国民意識はかなり高まったように感じられますが、人間社会にも多様性は重要なキーワードなはずで、多様な人材の育成をはじめ、多様性豊かな人材を持った組織は、グローバル化が進み、変化の激しい時代にはとりわけ重要だと思います。多様性の意義をジャガイモを例にしながら改めて考えてみます。ジャガイモは、植物育種や植物病理を研究する仲間では歴史を変えた植物として有名です。

ジャガイモは、ナス科ナス属の植物で、南米のアンデス地方が原生地です。また、インカ文明における主食はジャガイモでした。日本にはジャガタラ（現在のジャカルタ）を經由して伝来しました。中国では馬の首につける鈴に似ていたことから馬鈴薯（マーリンスウ）と呼ばれ、それが日本に伝わり、バレイショと呼ぶようになったと言われています。

ジャガイモはトウモロコシやタバコ、トマト、トウガラシなどとともに新大陸発見（1492年）後に南米から旧大陸（ヨーロッパ）へ持ち込まれました。ヨーロッパへ導入された当初は観賞用として栽培されました。ジャガイモがヨーロッパで広く栽培されるようになったのは1700年代後半になってからだと言われています。当時のヨーロッパ北部は食糧生産性が低く、飢餓が頻繁に起こっていました。

ジャガイモが食糧の乏しかったアイルランドに導入され、ジャガイモ栽培の普及による食糧供給の増大に伴ってアイルランドの人口は100年ほどの間に2.5倍に膨れ上がりました。ところが、1845年の夏に「疫病」という病気が大発生し、ジャガイモの収穫ができなくなり、アイルランドは大飢饉に襲われました。不幸にも1848年に同様の病気が再び大発生し、最悪の事態となりました。その結果、150~200万人が餓死し、アイルランドの4人か5人に1人が亡くなりました。さらに、100万人のアイルランド人がわずかな種イモを持って新天地アメリカへ移住したと言われてい

ます。

アイルランドの大飢饉は、ジャガイモの栽培方法と繁殖様式に原因があると考えられます。ジャガイモの栽培では種子を播くのではなく、種イモを分割増殖して植えるのが一般的です。南米からヨーロッパへはわずかな量の種イモしか持ち込まれなかつ



公開学術講演会について

日本学術会議中国・四国地区会議 運営協議会委員
(山口大学 名誉教授)

三浦 典子

平成22年度日本学術会議中国・四国地区会議公開学術講演会「医学領域と工学領域連携研究シンポジウム 未来を拓く医・工連携」が、日本学術会議中国・四国地区会議と山口大学の主催で、11月27日に山口大学医学部において開催された。

学術講演会の概要は以下の通りである。

丸本卓也山口大学学長の挨拶後、金澤一郎日本学術会議会長が「医工連携の来し方行く末」と題して講演された。講演では、1791年のルイージ・ガルヴァーニの電気による筋収縮以降の医工連携の歴史、わが国の大学や学会における医工連携の歴史、日本学術会議における医工連携の取り組みが紹介された。さらにこれからの医工連携については、日本学術会議が2010年4月に採択した「日本の展望 - 学術からの提言2010」において、臨床医学分野、総合工学分野、電気電子工学分野などで、提言がなされていることが述べられた。



講演中の金澤一郎会長

第I部の基調講演では、山口大学で取り組まれている医学領域と工学領域の連携研究に関して、「がん個別化医療に貢献する医・工連携」をテーマに、医学の立場から、山口大学大学院医学系研究科、医学部付属病院長の岡正朗教授が、工学の立場から、同じく医学系研究科生命分子工学分野の浜本義彦教授が講演を行なわれた。

まず岡教授は、がんに対する診断・治療薬の開発において、患者個々に対して医学的に最適な医療を行うために、DNA配列の解析を行い、遺伝子多型の測定によって薬剤や投薬量を決定することが必要であることを、遺伝子の具体的な組み合わせの例を示しながら詳細に説明され、そのDNAチップによる測定において情報工学との連携が行われていることを述べられた。

浜本教授からは、長年かかって研究開発された統計的パターン認識による肝臓再発診断システムが紹介された。このマイクロアレイチップによって数量化された遺伝子

発現データに基づくシステムにおいては、世界最高精度の93%の癌再発予測率が可能となっており、しかも用いる遺伝子の数は12と格段に少なくてすむことが述べられた。

このようなシステムの設計には、臨床医によってラベル付けされたサンプルを利用する、事前情報を活用する「教師あり学習」が適していることが強調され、医学との連携が不可欠であることが述べられた。

第Ⅱ部では、二人の基調講演者に、行政の立場から、中国経済産業局の井辺國夫局長、産業界の立場から、三浦勇一株式会社トクヤマ相談役を交え、堀憲次山口大学工学部長の司会でパネルディスカッションが展開された。

井辺氏は、2010年6月18日に閣議決定された「新成長戦略」に基づき、官の医工連携の推進に関する今後の方針、および中国地区における産官学の連携拠点を紹介

され、医工の連携は産官学の連携そのもので、連携のためには大学の研究現場の壁を乗り越えることの重要性を強調された。

三浦氏は、トクヤマグループにおけるメディカル関連事業について、素材型化学企業が歯科器材事業や遺伝子診断システム事業に進出していった経緯を紹介された。さらに、全国的な医工連携とともに、地域にも医工連携の仕組みがあり、地域の活性化のためには、国の補助金がある期間だけの産学公の連携ではなく、持続的な産学公の

連携が不可欠であることを強調された。

その後、100人を超える学術会議の関係者や山口地域の研究者や学生などのフロアーから、多彩な質問や意見が出され、活発な意見交換が行われ、佐々木功典山口大学医学部長のまとめによって、パネルディスカッションは終了した。

公開学術講演会は、山口大学で実



4人のパネリスト

左より井辺國夫、三浦勇一、岡正朗、浜本義彦の各氏



パネルディスカッションの様子1

際に行われている連携の具体的な例を中心に基調講演がなされたことから、専門領域を異にする出席者にも医療現場における医工の連携の役割と重要性が伝わってきた。



パネルディスカッションの様子2

また、連携による

研究成果が実用的に

役に立つようになるためには、産業界との連携が不可欠であり、医工連携で成果を上げている研究機関で養成された人材が、先端の業界に組み込まれていく仕組みづくりができれば、連携は循環となり、より大きな社会貢献に繋がっていくという課題が提示された。

会員・連携会員一覧(中国・四国地区)

【鳥取県】

三野 徹 (農学) 鳥取環境大学教授
京都大学名誉教授
岡山大学名誉教授
山下 博樹 (地域研究) 鳥取大学地域学部准教授

【島根県】

陶山 容子 (材料工学) 島根大学教授

【岡山県】

池端 雪浦 (史学) 東京外国語大学名誉教授
梶谷 文彦 (基礎医学) 川崎医療福祉大学副学長
川崎医科大学名誉教授
岡山大学特命教授
公文 裕巳 (臨床医学) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
泌尿器病態学教授
斎藤 清機 (化学) 放送大学岡山学習センター所長
笹尾 登 (物理学) 岡山大学教授
實成 文彦 (健康・生活科学) 山陽学園大学副学長
篠田 純男 (薬学) 岡山理科大学理学部教授
岡山大学名誉教授
白石 友紀 (農学) 岡山大学大学院自然科学研究科
教授
高階 秀爾 (史学) 大原美術館館長
東京大学名誉教授
滝川 正春 (歯学) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科/
歯学部口腔生化学・分子歯科学分野
教授
武田 和義 (農学) 岡山大学資源生物科学研究所
特命教授
中筋 房夫 (農学) 岡山大学名誉教授
中原 忠男 (心理学・教育学) 環太平洋大学学長特別補佐・教授
二宮 正夫 (物理学) 岡山量子科学研究所長
松本 英明 (農学) 岡山大学名誉教授
森島 恒雄 (臨床医学) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
小児医科学教授
渡邊 達夫 (歯学) 朝日医療専門学校岡山校校長

【広島県】

有本 章 (心理学・教育学) 比治山大学高等教育研究所所長、
現代文化学部教授
広島大学名誉教授
岩田 穆 (電気電子工学) 広島大学名誉教授
太田 茂 (薬学) (株)エイアールテック代表取締役
広島大学大学院医歯薬学総合研究科
教授
岡山大学薬学部長
岡崎 正之 (歯学) 広島大学大学院医歯薬学総合研究科
教授
岡本 祐子 (心理学・教育学) 広島大学大学院教育学研究科教授
奥村 晃史 (地球惑星科学) 広島大学大学院文学研究科教授
神谷 研二 (基礎医学) 広島大学原爆放射線医科学研究所
所長・教授
住居 広士 (社会学) 県立広島大学保健福祉学部教授
谷口 順彦 (食料科学) 福山大学生命工学部
附属内海生物資源研究所教授
利島 保 (心理学・教育学) 広島大学名誉教授
県立広島大学理事
平野 敏彦 (法学) 広島大学大学院法務研究科教授
前川 功一 (経済学) 広島経済大学学長
松田 文子 (心理学・教育学) 福山大学学長、人間文化学部教授
三浦 道子 (電気電子工学) 広島大学大学院先端物質科学研究科
教授

山脇 成人 (臨床医学) 広島大学大学院医歯薬学総合研究科
精神神経医科学教授
横尾 京子 (健康・生活科学) 広島大学大学院保健学研究科教授
(副研究科長)
吉里 勝利 (基礎生物学) 広島大学名誉教授
大阪市立大学医学研究科客員教授
(株)フェニックスバイオ学術顧問

【山口県】

小川 全夫 (社会学) 熊本学園大学社会福祉学部教授
加藤 紘 (臨床医学) 山口大学名誉教授
早川 誠而 (農学) ときわミュージアム企画監
山口大学名誉教授
松崎 益 (臨床医学) 山口大学大学院医学系研究科
器官病態内科学教授
三浦 典子 (社会学) 山口大学名誉教授

【徳島県】

市川 哲雄 (歯学) 徳島大学
ヘルスバイオサイエンス研究部教授
佐々木宏子 (心理学・教育学) 鳴門教育大学名誉教授
非常勤研究員
曾根 三郎 (臨床医学) 徳島大学大学院
ヘルスバイオサイエンス研究部教授

【香川県】

一井眞比古 (農学) 香川大学学長
井原 理代 (経営学) 香川大学大学院地域マネジメント研究科
教授、研究科長
嘉門 雅史 (工学・薬学) 香川高等専門学校校長
神江 伸介 (政治学) 香川大学法学部教授

【愛媛県】

佐藤 晃一 (食料科学) ARUK 地域環境工学 研究所
(愛媛大学名誉教授、農学博士、
技術士(農学部部門))
橘 燦郎 (食料科学) 愛媛大学農学部教授
田邊 信介 (環境学) 愛媛大学沿岸環境科学研究センター
教授
野並 浩 (農学) 愛媛大学農学部教授
山内 皓平 (食料科学) 愛媛大学社会連携推進機構教授
南予水産研究センター長

【高知県】

赤澤 威 (基礎生物学) 高知工科大学・総合研究所教授
飯國 芳明 (農学) 高知大学大学院
黒潮圏海洋科学研究科教授
宇高 恵子 (基礎医学) 高知大学医学部免疫学教室教授
岡村 甫 (工学・薬学) 高知工科大学理事長
佐久間健人 (材料工学) 高知工科大学副理事長・学長
野嶋佐由美 (健康・生活科学) 高知女子大学看護学部学部長

【その他】

菊池 章 (基礎医学) 大阪大学大学院医学系研究科
分子病態生化学教授
窪田 幸子 (地域研究) 神戸大学大学院国際文化学研究科
教授
藤田正憲 (環境学)

印は会員

一部の連携会員の専門分野及び現職名は選考時(平成20年3月)のものです。

地区会議事務局からのお知らせ

1 平成22年度日本学術会議中国・四国地区会議事業報告

事業名・期日(時期)・場所等	事業内容
第1回地区会議運営協議会 平成22年11月27日(土) 12:00~13:30 山口大学医学部霜仁会館(宇部市)	【協議事項】 平成22年度事業計画について ②平成23年度公開学術講演会等について ③科学者懇談会について
第1回公開学術講演会 平成22年11月27日(土) 14:00~17:15 山口大学医学部第3講義室(宇部市)	【テーマ】 「未来を拓く医・工連携」 【講演】 日本学術会議会長 金澤 一郎 【基調講演】 山口大学大学院医学系研究科(医学) 教授 岡 正朗 山口大学大学院医学系研究科(工学) 教授 浜本 義彦 【パネルディスカッション】 司 会：山口大学工学部長 堀 憲次 まとめ総括：山口大学医学部長 佐々木 功典 パネラー：中国経済産業局長 井辺 國夫 株式会社トクヤマ相談役 三浦 勇一 山口大学大学院医学系研究科(医学) 教授 岡 正朗 山口大学大学院医学系研究科(工学) 教授 浜本 義彦
第2回地区会議運営協議会 平成23年3月14日(月) 13:30~15:00 広島大学医学部広仁会館(広島市)	【協議事項】 運営協議会委員の交替について ②平成23年度事業計画について ③平成23年度地区ニュースについて
地区ニュース発行	中国・四国地区の日本学術会議会員・連携会員及び教育研究機関等へ配布

2 平成23年度公開学術講演会について

日 時：平成23年7月23日(土)14:00~17:00(予定)

場 所：愛媛大学(松山市)

テーマ：「愛媛大学先端研究」- 拠点化の歩み -

詳細については、決定次第別途ご案内させていただきます。

原稿募集

地区ニュースは科学者の方々と日本学術会議中国・四国地区会議との連繋を図ることを主な目的としております。

日本学術会議あるいは教育，研究，学術等に関する率直なご意見，ご希望等をお寄せくださいますようお願い致します。

お 願 い

回覧等により，多くの方々に読んで頂きますよう，ご配慮願います。

日本学術会議中国・四国地区会議事務局

〒739 8511 東広島市鏡山一丁目3番2号

(広島大学学術室学術企画グループ内)

TEL: 082 424 4336 FAX: 082 424 6990

E-mail: gakujutu-kikaku@office.hiroshima-u.ac.jp